

造林事業の改善成果について

古川営林署 光 賀 求

1. はじめに

造林事業の作業改善を進めるに当って、各営林署において独自の改善が実施され、相当の生産性を上げ国有林経営に好影響を与えて、やがて来る国産材時代に向い、明るい夢を期待しながら努力しているところである。

夏既担当区においても、改善計画が設定されて以来、営林署の指導のもとに、担当区全員一丸となって、労働生産性向上に努力して、かなりの成果を得ている。

昭和55年度の造林事業は11月で終了したので、この結果から目標とした期間内に49年度の実績を上廻る功程を得たので、その事例を報告する。

2. 作業改善への取組み

夏既担当区では、昭和52、53年度をピークに全般にわたって功程が落ち込み、各署の平均功程はおろか、当署においても低位にあまんじ、肩身の狭い状態であった。この汚名から1日も早く抜け出したい、早急に返上したい気持ちが作業班全員に盛り上がり、署の計画された、現場検討会、研修、他署の現場視察、反省会等には積極的に参加して汚名返上に努力して来た。

特に54年9月実施された、小坂署の小黒川国有林の地拵えを主とした現場視察では、現在まで営々として続けてきた方法に特別な疑問を持たず、地拵えとは、この方法で当然だと思っていたものが、現場の条件、作業の方法、考え方など説明を受けて、現場の状態、班の人的構成等、我が担当区と類似しているにも係わらず、作業功程には大きな差があることを認識させられて、1種の衝撃を受けて帰った。

これが1つのはずみとなって、夏既には多くの改善点があることに気付いた。

昼食時の短い時間を利用した話し合い、安全懇談会、事業打合せ等、機会あるたびに、各自のアイデアを出し合い伯仲した論議を積重ねながら実行してみる。安全面あるいは今後の一連の造林作業に悪影響が出た場合には話し合いの中から改善して行く。又、他署の良い所は積極的に取り入れて自分達のものにすることに心掛けて、ひとつひとつ丁寧に前向きな姿勢で取り組んできたことが目標を上廻る成果を得たものと考えている。

3. 成 果

改善への取組みの中から、代表的な地拵、下刈作業について述べると、

(1) 下刈り作業の実績功程の推移は別表1のとおりである。

尚、この成果を得た対応策としては次の2点がある。

ア 山に応じた作業

下刈の記番の中には、谷筋、尾根筋、それぞれの植生の特長を持っており、又、その成長も異なり、目的樹種の成長具合も違う、この兼合いの中で多少潔癖さを欠いた方法を取ってもさほど影響のない造林地では、それなりの刈方を実施して、全面積一率な刈方はさけている。

イ 山に応じた人員配置

分散伐区方式が取り入れられて以来、1記番の面積が小さくなり、一班全員が作業地に入ることはロスになりやすいことが間々ある。従って主任との打合せの中で決定した記番毎の必要人員をふまえて、自主的な班独自の目標功程を設定して、これに見合った人員を配置している。

なお、担当区55年度下刈作業量は60記番、172haで平均記番面積は2.86ha(0.17～11.67ha)である。

(2) 地拵作業の実績功程の推移は別表2のとおりであるが特筆する作業方法を述べると次のとおりである。

ア 伐採跡地の低質材二次処分

1～4林班(通称水洞地域)では、ブナを主体とした、天然広葉樹林であるため、末木枝条が多く、又小径木も非常に多い。伐採搬出後どうしても山に残る率が多いため、主伐後跡地の二次処分を実施して、木材資源の有効活用と地拵えの労働力節減を図っている。

ちなみに、55年度立木調査した3い林小班、2.33haの中で総本数2,203本、524m³の内、チップに該当する径級12cm以下は825本、37%を占めて、更に低質材以下の14～18cm以下を含めると1,541本70%を占めており、直営生産事業との係わりの中で、異論の生ずるところであるが、小径木の異常に多い山では、止むを得ないものと考えている。

イ 山に応じた作業

末木枝条の堆積状態、植生、傾斜等、現場の諸条件によって状況に応じた作業方法をしており、画一的な作業方法はさけているが、次のとおりである。

(ア) 末木枝条の処理方法は特に拘わらず、出来る限り移動しないようにして、筋間隔も一定ではない。従って、植付本数に合った方法を取っている。

(イ) 留杭を廃止して、切株を利用している。54年度実行し、ひと冬経過した時点では、特に問題点は生じていない。

(ウ) 末木枝条が多いか所では寄焼をしている。

(エ) 上部より下方へ向って作業を進めている。

(オ) か所によっては無地拵え地もあり、特に低質材二次処分地に多い。

ウ 山に合った人員配置

下刈り作業同様、班独自の目標功程を設定してロスのない人員を配置している。

エ 直営生産事業との連携の中で全木集材を執行

54年度一部分に試験的に実施して、有利性が認められたので、55年度冬山より実施可能地を選定して、本格的に取り組むこととしている。

4. 今後の取組みとまとめ

生産性を追求する中で、現状では、現場部門での改善には、おのづと限界が生じてくるが、何よりも、本気で、根気にとつとつ丁寧に、やる気になって取り組むことが大切である。上部の方針、考え方を実行することはもとより、その趣旨を前向きに理解して、山の将来を考えながら、今山では何をやるべきか、又、どの程度やるべきかを追求して行ける、現場の体制を作ることが大切である。このことが生産性向上につながるものと確信する。

夏既担当区では当面する課題として、次のことを考えている。

(1) 適正な作業方法と適正な功程の確立

自分達が納得して、誰からみても、頷づける方法と功程を早く確立したい。

(2) 林地除草剤の有効活用

山に応じた適正な方法で、地域の人達の理解を得ながら実施したい。

(3) 刈払機の使用拡大

55年度は全面積人力で実行しており、又使用できる人は20人中4人である。局で実施される機械研修には積極的に参加して、振動障害の問題もあるが、適格者には全員、機械作業が出来るようにして、質の良い作業と、労働強度の軽減を図りたい。

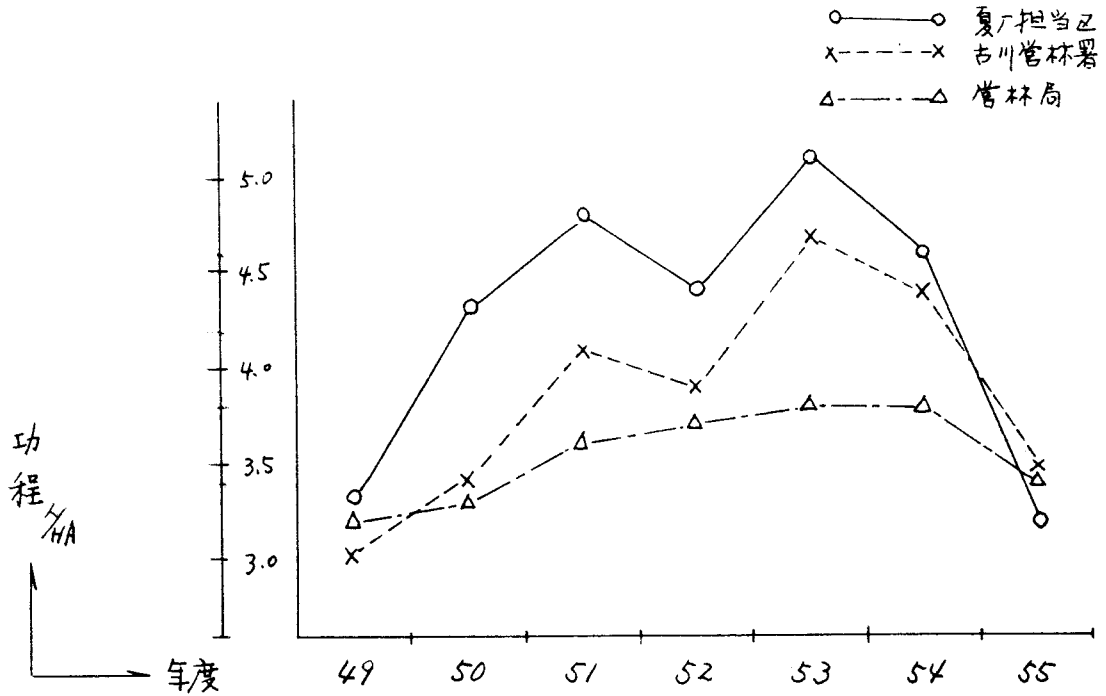
(4) 能率給制度を導入したい。

色々な経緯があって、従来から全作業日給で実行しているが、作業意欲の向上と円滑な事業の進行を図るため能率給を導入すべきと考えている。

以上願望も含めて、今後の課題を述べたが幸いにして、当署では、夏山は造林事業、冬山は製品事業のパターンが確立されており、伐採から造林、保育まで一貫した作業に従事出来るため、1人1人が後々のことを考えた作業を実行するので、山づくりには大変有利となっている。

以上、作業改善の取組みと、その成果について報告し、今後の改善に資すると共に、ご意見、ご批判を仰ぎ、なお一層の努力をしたい。

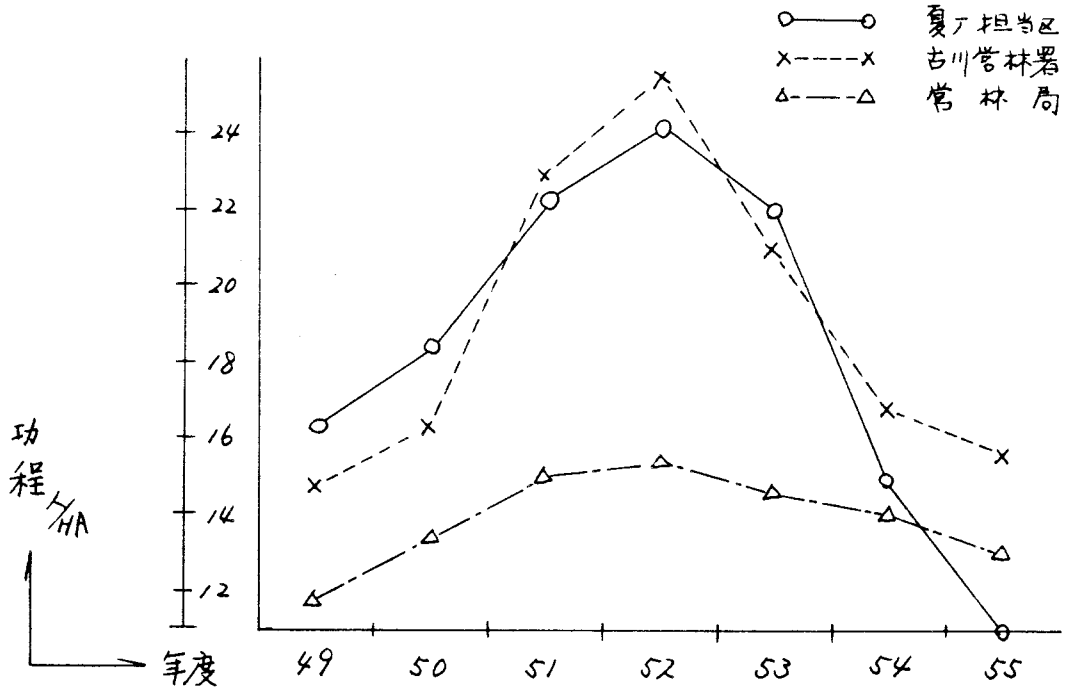
表1. 下刈作業功程の推移



夏既担当区 功程	3.8	4.3	4.8	4.4	5.1	4.6	3.2
49年を100とした場合の指数	100	113.2	126.3	115.8	134.2	121.1	84.2
古川管林署平均功程	3.0	3.4	4.1	3.9	4.6	4.4	3.5
管林局平均功程	3.3	3.4	3.6	3.7	3.8	3.8	3.4

1. 54年までは、局、署の平均より高い功程であったが、55年には追い越した。
2. 目標とした49年3.8人/haを、55年で3.2人/haと目標を達成し、更に0.6人/ha上廻る功程アップとなった。
3. 目標とした49年を100とした指数では、最高の53年で134.2、54年で121.1と下降に向い、55年84.2となった。
4. 最高の53年5.1人/haと比較して、1.9人/haの省力化に成功し、その指数62.7となった。

表2. 地拵作業工程の推移



夏厩担当区 工程	16.3	18.5	22.3	24.2	22.0	14.9	11.0
49年を100とした場合の指数	100	113.5	136.8	148.5	135.0	91.4	67.5
古川営林署平均工程	14.7	16.3	22.9	25.5	21.0	16.9	13.6
営林局平均工程	11.7	13.3	15.0	15.2	14.3	14.0	13.0

1. 局平均に対して53年までかなり高い工程であったが、54年に接近して、55年ではha当り2.0人少ない工程となった。
2. 目標とした49年、16.3人/haを54年で上廻り、更に55年には5.3人/haの省力化に成功した。
3. 目標とした49年を100とした指数では最高の52年で148.5、53年で135と下降線に向い、54年91.4、55年で67.5となり大幅な工程アップを達成した。
4. 最高の52年24.2人と比較して、実に13.5人/haと半数以下の省力化して、その指数45.4となった。